

# 『続日本紀』の薨卒記事

野口 武司

B (藤原朝臣仲麻呂討伐・鎮定事業) に関して……………藤原豊成・藤原真楯両者の各薨卒記事に関連させて

右大臣従一位藤原朝臣豊成の薨卒記事

①平城朝正一位贈太政大臣武智麻呂之長子也。養老七年。以②内舍人兼③兵部大丞。神龜元年授④從五位下。任⑤兵部少輔。頻歷⑥顯要。天平十四年。至⑦從三位中務卿兼中衛大將。廿年。自⑧中納言轉⑨大納言。感寶元年⑩得⑪其隙。時其弟大納言仲滿執政專權。勢傾大臣。大臣天資弘厚。時望攸歸。仲滿每欲中傷。未得。其隙。大臣第三子乙繩。平生與橘奈良麻呂相善。由是奈良麻呂等事覺之日。仲滿誣以黨逆。左遷日向掾。促令之官。而左降大臣爲大宰員外帥。大臣到難波別業。稱病不去。居八歲。仲滿謀反伏誅。即日復本官。時年六十二。(天平神護1 11 27条)

斯様に豊成の某官職・某位階への就任・昇叙の各時期に就いて、傍——、若しくは傍——を以て各々示してあるが、これは、前者（傍——）の場合、当該官職・位階への就任、若しくは昇叙の各時期に就いて、これが妥当なもの、或いは、然様に見做せるものであり、後者（傍——）の場合、当該官職・位階への就任、若しくは昇叙の各時期に就いて、これが未詳なもの、或いは、然様に見做せるものの孰れであるかを示している。以下に於いても、斯様な判別方式が適用されるものと見做されたい。

ところで、この豊成薨卒記事にみる官職就任や位階昇叙の各時期に関する信憑性の内実如何に就いて述べてみるに、傍線付記部分（豊成の世系出自）に続く傍波線付記部分、傍線付記部分のうち、神亀元年に従五位下に叙位されたこと④、天平廿年に大納言に任官されたこと⑩、感宝元年に右大臣に任官されたこと⑪、抔と謂うように可成り精確さを欠くものであることを指摘し得よう。

右記に示す藤原朝臣豊成薨卒記事には、当人豊成より二才年少の舍弟ナカマロを仲満と記載する個処が四例程みられる。このように仲満が某人士の薨卒事中に四例もみられる事例は、他になく、しかも、当該薨卒記事中にナカマロが仲満以外——例えば、通常記載される仲麻呂など——に記載されているような事例は皆無である。

扱、（天平）感宝元年当時、右大臣を拜命していた兄豊成は、天性の資質に弘く厚いものがあり、時望の帰する攸があつた。これに対して弟仲満（仲麻呂）は、常に兄豊成を中傷せんとしていたが、兄豊成は容易に附け入る隙を与えぬようにしていた。然うした時に、大臣豊成の第三子乙繩が、平素より橘奈良麻呂と親善関係にあつたこと依り、乙繩



は仲満に反逆者の一味であると誣告されて日向国掾に左遷された。乙繩は仲満にせき立てられて任地日向国へ出向させられた。さらに加えて豊成も、右大臣の地位から左降されて大宰員外帥となった。大臣は任地へ赴任する途次、難波の別業に到り、此処で病痾療養の為と称して、任地へは赴かなかつた。彼の地に留まること八年目にして、弟仲満（恵美押勝）が誅伐されるに到り、本官に戻されて長年過した偶宿より本邸に還歸した。斯うして培われた豊成の經世觀望の卓越さは、嘗て諸情報を入手して大納言恵美押勝（仲満）の刺殺を企図していた人士等に対して「大納言（仲満）は未だ年齒若輩故に、然うしたことをせぬようにと己れ躬らが教誨を加えよう。」と陳述した旨の記載（天平宝字172条）があり、この記載の内実は、寓目しなければならぬであろう。

つぎに然うした豊成の諸種に亘る活動の一斑を簡潔に纏めて示しておくこととする。

#### 〈行幸供奉奉仕等諸活動〉

行幸難波宮<sup>一</sup>以<sup>二</sup>知太政官事正三位鈴鹿王<sup>一</sup>。正四位下兵部卿藤原朝臣豊成<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>留守<sup>一</sup>（天平1227条）

行幸伊勢国<sup>一</sup>以<sup>二</sup>知太政官事兼式部卿正二位鈴鹿王<sup>一</sup>。兵部卿兼中務大將正四位下藤原朝臣豊成<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>留守<sup>一</sup>（天平1229条）

詔留守從三位大養德國守大野朝臣東人。兵部卿正四位下藤原朝臣豊成等<sup>一</sup>曰。自<sup>レ</sup>今以後。五位以上不<sup>レ</sup>得<sup>三</sup>任意住<sup>二</sup>於平城<sup>一</sup>。如有<sup>二</sup>事故<sup>一</sup>應<sup>レ</sup>退歸<sup>一</sup>。被<sup>二</sup>賜官符<sup>一</sup>然後聽<sup>レ</sup>之。其見<sup>二</sup>在平城<sup>一</sup>者。限<sup>二</sup>今月内<sup>一</sup>悉皆催發。自餘散<sup>二</sup>在他所<sup>一</sup>者亦。宜<sup>二</sup>急追<sup>一</sup>。（天平13③15条）

行<sup>二</sup>幸宇治及山科<sup>一</sup>。五位已上皆悉從<sup>レ</sup>駕。追<sup>二</sup>奈良留守兵部卿正四位下藤原朝臣豐成<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>留守<sup>一</sup>。(天平13 9 30条)

行<sup>二</sup>幸難波宮<sup>一</sup>。以<sup>二</sup>中納言從三位巨勢朝臣奈弓麻呂<sup>一</sup>藤原朝臣豐成爲<sup>二</sup>留守<sup>一</sup>。(天平17 8 28条)

〈太皇太后藤原宮子崩御〉

從二位藤原朝臣豐成(九名略)爲<sup>二</sup>造山司<sup>一</sup>。六位已下廿一人。(天平勝宝6 7 20条)

〈聖武太上天皇崩御〉

以<sup>二</sup>從二位藤原朝臣豐成(七名略)爲<sup>二</sup>御裝束司<sup>一</sup>。六位已下十人。(天平勝宝8 5 3条)

〔奉戴勅旨〕菩薩戒を保持して冥路を辿る死者の助けとせんがため梵網經を講說せしむ。

右大臣從二位藤原朝臣豐成……於<sup>二</sup>大安寺(担当寺院)<sup>一</sup>講<sup>二</sup>梵網經<sup>一</sup>(天平勝宝8 12 30条)

〈奉報〉

皇太子道祖王。身居<sup>二</sup>諒闇<sup>一</sup>。志在<sup>二</sup>淫縱<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>加<sup>二</sup>教勅<sup>一</sup>。曾无<sup>二</sup>改悔<sup>一</sup>。於<sup>レ</sup>是。勅召<sup>二</sup>群臣<sup>一</sup>。以示<sup>二</sup>先帝遺詔<sup>一</sup>。因問<sup>二</sup>廢不之事<sup>一</sup>。右大臣已下同奏云。不敢乖<sup>二</sup>違顧命之旨<sup>一</sup>。是日。廢<sup>二</sup>皇太子<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>王歸<sup>レ</sup>第。(天平宝字1 3 29条)

天皇召<sup>二</sup>羣臣<sup>一</sup>問曰。當<sup>レ</sup>立<sup>二</sup>誰王<sup>一</sup>以爲<sup>二</sup>皇嗣<sup>上</sup>。右大臣藤原朝臣豐成。中務卿藤原朝臣永手等言曰。道祖王兄塩燒王可<sup>レ</sup>立也。攝津大夫文室真人珍努。左大辨大伴宿禰古麻呂等言曰。池田王可<sup>レ</sup>立也。大納言藤原朝臣仲麻呂言曰。知<sup>レ</sup>臣者莫<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>君。知<sup>レ</sup>子者莫<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>父。唯奉<sup>二</sup>天意所<sup>レ</sup>擇者<sup>一</sup>耳。(天平宝字1 4 4条)

〔既述〕右大臣答云。大納言年少也。吾加<sup>二</sup>教誨<sup>一</sup>宜<sup>レ</sup>莫<sup>レ</sup>殺之。(天平宝字1 7 2条)

右大臣從一位藤原朝臣豐成等上<sup>レ</sup>表言。臣等曾祖大織冠内大臣踏<sup>レ</sup>義懷<sup>レ</sup>忠。許<sup>レ</sup>身奉<sup>レ</sup>國。皇朝籍<sup>二</sup>其不世之勳<sup>一</sup>。錫

以<sup>③</sup>無窮之賞<sup>①</sup>。胤子正一位太政大臣。確陳<sup>②</sup>丹誠。抗<sup>④</sup>表固辭。天朝即割<sup>③</sup>賜二千戶。傳及<sup>③</sup>子孫。臣等以。累世家門久沐<sup>③</sup>榮寵。豈悟。逆賊仲麻呂近出<sup>③</sup>臣族。極<sup>④</sup>凶肆逆。若<sup>④</sup>斯之甚。今臣等即以<sup>③</sup>凶道之囚族。猶霑<sup>③</sup>忠槩之餘封。以<sup>③</sup>何面目<sup>③</sup>叨近<sup>③</sup>殊厚。伏願。奉<sup>④</sup>納<sup>④</sup>先代所<sup>④</sup>賜功封。少塞<sup>③</sup>天下之責。無<sup>④</sup>任<sup>④</sup>兢惶之至。奉<sup>④</sup>表以聞。詔許<sup>④</sup>之。(天平神護1415条)

大納言正三位藤原朝臣眞楯の薨卒記事

①平城朝贈正一位太政大臣房前之第三子也。眞楯度量弘深。有<sup>②</sup>公輔之才<sup>②</sup>。起<sup>③</sup>家春宮大進<sup>③</sup>。稍遷至<sup>③</sup>正五位下<sup>④</sup>式部大輔兼左衛士督<sup>⑤</sup>。在<sup>④</sup>官公廉。慮不<sup>④</sup>及私。感神聖武皇帝寵遇特渥。詔特令<sup>④</sup>參<sup>④</sup>奏宣吐納。明敏有<sup>④</sup>譽<sup>④</sup>於時<sup>④</sup>。從兄仲滿心害<sup>④</sup>其能<sup>④</sup>。眞楯知<sup>④</sup>之。稱<sup>④</sup>病家居。頗翫<sup>④</sup>書籍<sup>④</sup>。天平末出爲<sup>④</sup>大和守<sup>④</sup>。勝寶初授<sup>④</sup>從四位上<sup>④</sup>。拜<sup>④</sup>參議<sup>④</sup>。累遷<sup>④</sup>信部卿兼大宰帥<sup>④</sup>。干<sup>④</sup>時。渤海使楊承慶朝禮云畢。欲<sup>④</sup>歸<sup>④</sup>本蕃<sup>④</sup>。眞楯設<sup>④</sup>宴餞<sup>④</sup>焉。承慶甚稱<sup>④</sup>歎之<sup>④</sup>。寶字四年授<sup>④</sup>從三位<sup>④</sup>。更賜<sup>④</sup>名眞楯<sup>④</sup>。本名八束。八年至<sup>④</sup>正三位勳二等兼授刀大將<sup>④</sup>。神護二年拜<sup>④</sup>大納言兼式部卿<sup>④</sup>。薨時年五十二。賜以<sup>④</sup>大臣之葬<sup>④</sup>。使<sup>④</sup>民部卿正四位下兼勅旨大輔侍從勳三等藤原朝臣繩麻呂。右少辨從五位上大伴宿禰伯麻呂弔<sup>④</sup>之。(天平神護2312条)

①傍線付記部分(眞楯の世系出自)

②春宮大進……………天平十一年四月廿六日写經司解への書入に「大進八束宣」とある。

③ 正五位下……………天平十五年五月に従五位上から正五位上に昇叙。ここは「正五位上」とあるべきか。国史大系本

頭注も「據<sup>三</sup>上文天平十五年五月紀「改」とある。

④ 式部大輔……………任官の年時は未詳。

⑤ 左衛士督……………天平十三年十二月己亥条に右衛士督に任じられたとあり、同十七年二月二十四日の式部省移に「右

衛士督兼大輔藤原朝臣」とあるから「左衛士」は「右衛士」か。当時の左衛士督は、佐伯浄麻呂（天平十年四月庚申・同十七年六月庚寅条）。

⑥ 天平末……………大和守任官の年時は未詳。補任では天平二十年三月二十二日参議に任じられた折、もと右衛士督

⑦ 大和守……………兼式部大輔大和守であつたとする。

⑧ 勝宝初

⑨ 従四位上……………天平十六年十一月正五位上から従四位下。天平勝宝六年正月従四位上へ昇叙。ここは従四位上

⑩ 参議……………とあるべきか（国史大系本でもこのように改められている）参議任命は、補任では天平二十年三月

二十二日。続紀での初見は、天平宝字二年八月甲子条に「参議正四位下中務卿藤原朝臣眞楯」<sup>二十五日</sup>と

ある。

⑪ 信部卿……………中務卿。任官の年時は天平宝字六年十二月。

⑫ 大宰帥……………大宰帥任官を天平宝字四年正月とする。

⑬ 宝字四年……………これはこのままで正しい。

⑭ 從三位……………從三位への叙位は天平宝字四年正月。

⑮ 眞楯……………続紀では天平宝字二年八月甲子条から「眞楯」と記し、同八月二十五日の太政官奏（古四―二九三頁）

にも「眞楯」と記している。

⑯ 八年……………

正三位への昇叙は天平宝字八年九月。

⑰ 正三位……………

⑱ 勳二等……………勳二等の叙勳は天平神護元年正月。

⑲ 授刀大將……………

（授刀衛長官）  
授刀大將への任官は、補任では天平宝字八年九月十一日。

⑳ 神護二年……………

㉑ 大納言……………大納言任官は天平神護二年正月。但し式部卿任官のことは見えない。

㉒ 式部卿……………

㉓ 賜以「大臣之葬」……………喪事の監護、贈物等の扱いを大臣と同格とする。

衆知の如く、天皇治政下に中央政庁たる諸官衙に於いて生成されてきた数多に及ぶ諸種の決裁事項は、歴史に能く誌されている攷である。

扱 天皇が行なわれる政事の基本理念に就いて、例えば、「身居「紫宮」。心在「黔首」。無「委」卿等。何化「天下」。」

『続日本紀』養老5216条。或いは又、「詳思<sup>二</sup>布政之方<sup>一</sup>。莫<sup>レ</sup>先<sup>二</sup>仁恕之典<sup>一</sup>。故賑恤之惠。無<sup>レ</sup>隔<sup>二</sup>遐方<sup>一</sup>。撫育之仁。普覃<sup>二</sup>寓内<sup>一</sup>」  
 『続日本紀』養老6421条。「云々等と謂う詔を下され給うてゐる。」  
 扱こそ

A (蝦夷諸地域の征討・平定事業) に関して……………具名記載者<sup>(後掲表参照)</sup>は、僅々十五名であることを知り得るが、具名不記載者全員数に就いては、「征夷將軍以下一千六百九十六人」(神亀2①22条)にも達しており、此等の將士等は、各々の地位や功勞に應じて、左掲一覧表に示す如き授勲の榮譽に浴している。

官位階	人 士 名	勲位階	神亀二年未迄の位階
從三位	藤原朝臣宇合	勲二等	
從四位下	大野朝臣東人	勲四等	
正五位下	高橋朝臣安麻呂	勲五等	
從五位上	中臣朝臣廣見	勲五等	
從七位下	後部王起	勲六等	已下十名 賜 <sup>二</sup> 田二町 <sup>一</sup>
正八位上	佐伯宿禰首麻呂	勲六等	
正八位上	五百原君虫麻呂	勲六等	

從七位下	君子・龍麻呂	勳六等	
從八位上	出部直佩刀	勳六等	
少初位上	紀朝臣牟良自	勳六等	
正八位上	田邊史難波	勳六等	
從六位下	坂下朝臣頭麻佐	勳六等	
外從六位上	丸子大國	勳六等	
外從八位上	國覓忌寸勝麻呂	勳六等	
從三位	坂上大宿禰苅田麻呂	勳二等	延曆517条 (薨去伝記載)

◎坂上大宿禰苅田麻呂は、天平神護元年に勳二等を授与、延暦四年に従三位を叙位されている。

処で、この藤原朝臣眞楯薨卒記事には、ナカマロ（仲満）の記載が僅か一例しか見られない。系譜上から言えば、仲満は既述の豊成より二才年少の舎弟であり、ここで取り扱っている眞楯より九才年長の従兄関係と謂う親族的には極く近い、言わば、身内関係にある者同士ということになる。斯うした豊成・仲満・眞楯三者の中に在って、仲満は、生来、権勢や権力への志向願望を殊の外つよく持っていたので、事程左様に敵害心を燃やして警戒していた。こうし

た人となりの仲満<sup>||</sup>に対して豊成や眞楯も充分に心得ていたから、真面に取り合わず、言わば、当らず触らずのスタンスを採り続けていた。やがて時節到来、ナカマロは、竟に謀叛を起して葬り去られた。いま、ここにナカマロ討伐に殊勲を立てた男女両性の人士等の次第を天平神護元年正月七日現在時点で取り纏めて一括表示すると左掲の如くなる。

官位階	人 士 名	勳位階	天平神護元年の位階
正三位	諱（後の光仁天皇）	勳二等	
從三位	和氣王	勳二等	
從三位	山村王	勳二等	
正三位	藤原朝臣永手	勳二等	↓ 從二位（1924条）
正三位	藤原朝臣眞楯	勳二等	
從三位	吉備朝臣眞備	勳二等	↓ 正三位（1924条）
從三位	藤原朝臣藏下麻呂	勳二等	
從四位上	日下部宿禰子麻呂	勳二等	
從四位下	佐伯宿禰伊多智	勳二等	
從四位下	坂上大忌寸苅田麻呂	勳二等	
從四位下	牡鹿宿禰嶋足	勳二等	



外從五位下	金刺舍人八麻呂	↓	勳六等	
從五位下	漆部直伊波	↓	勳六等	
從五位上	石川朝臣垣守	↓	勳六等	
正五位下	津連秋主	↓	勳六等	
正五位上	安倍朝臣息道	↓	勳六等	
從五位下	坂上王	↓	勳六等	
從四位下	安倍朝臣彌夫人	↓	勳五等	
從五位下	石村村主石楯	↓	勳四等	
正五位下	小野朝臣竹良	↓	勳四等	↓ 從四位下（1123条）
從四位下	高丘連比良麻呂	↓	勳四等	
從四位下	藤原朝臣楓麻呂	↓	勳四等	
從四位下	藤原朝臣濱足	↓	勳四等	
正四位下	中臣朝臣清麻呂	↓	勳四等	↓ 從三位（1123条）
從四位下	弓削御清朝臣淨人	↓	勳三等	↓ 從四位上（122条）
從四位下	粟田朝臣道麻呂	↓	勳三等	
從四位下	藤原朝臣繩麻呂	↓	勳三等	↓ 正四位下（11013条）

從六位上	藤野別真人清麻呂	↓	勳六等	
從三位	池上女王	↓	勳二等	
從五位上	紀朝臣益女	↓	勳三等	
從四位下	竹宿禰乙女	↓	勳四等	
正五位上	吉備朝臣由利	↓	勳四等	
正五位上	稻蜂間宿禰仲村女	↓	勳四等	
正五位上	大野朝臣仲智	↓	勳四等	
正五位上	安倍朝臣都與利	↓	勳四等	
從五位下	藤原朝臣玄信	↓	勳四等	
從五位下	壬生直小家主女	↓	勳五等	
從五位下	藤野別真人虫女	↓	勳六等	
從五位下	巨勢朝臣魚名	↓	勳六等	
外從五位下	賀陽臣小玉女	↓	勳六等	
外從五位下	桑原連嶋主	↓	勳六等	
外從五位下	草鹿酒人宿禰水女	↓	勳六等	
外從五位下	田邊公吉女	↓	勳六等	

C (西南諸地域の征討・平定事業) に関して……………「討薩摩隼人」(大宝2914条)、「大宰府請有勳位」(同384条)。「今討隼賊將軍并士卒等戰陣有功者一千二百八十餘人。並宜隨勞授勳焉。」(和銅675条)。「征討陸奥蝦夷。大隅薩摩隼人等將軍已下及有功蝦夷。并譯語人。授勳位各有差。」(養老6416条)云々とある各功勞軍士に対し、応分の敍勲が執行されたと謂う。

これらAとCの中、B事業の執行展開された地域が、他余の其れに相違して天皇の座します朝廷、即ち平城京であり、当地には多くの諸官衙、宮掖・掖庭が林立し、此處には数多の男女両性の奉仕者達が群居しており、中に就き、取り分け数多の女性が存在したのは、刮目されてよい事象と言い得よう。それに尚、件のB事業が続行、完遂される上に於いて、伊勢、美濃、越前(所謂三関国)へと連なる近江国が、重要地域と見做されているのも看過しえぬ重要な点と言えよう。何となれば、爾後に於ける皇位継承問題を彼此考量する上に於いて、当地域が其の策源地として極めて相応しいと思量されるからである。

近江入国後の天平宝字八(七六四)九月十八日・廿兩日条の記載検討について

孝謙上皇に謀叛・反逆して京師奈良の地から、己が枢要な勢力圏とする近江国へ逃走した藤原恵美押勝を首領とする將士等の軍(以下、賊軍と仮称する)は、追手の同上皇軍(以下、官軍と仮称する)と諸処で数度に及ぶ戦闘を展開し、竟に勝野の鬼江を阻

として鋭を尽し拒戦するも、押勝を初めとして其の妻子三四人と、眷族従者卅四人との悉くが斬殺されたと謂う。斯様な顛末に就いて『新日本古典文学大系』15 続日本紀 四（岩波書店一九九五）年六月九日発行）を参考にして観てみよう（△印は賊軍）の各行營。

十八日条

道きて宇治より近江に奔り拠る。山背守日下部子麻呂・衛門少尉佐伯伊多智ら、直に田原道を取り、先に近江に至りて勢多橋を焼く。押勝これを見て色を失ひ、即便ち高嶋郡に走りて前少領角家足が宅に宿る。是の夜、星有りて押勝が臥せる屋の上に落つ。その大きな襖の如し。伊多智ら馳せて、越前國に到りて守辛加知を斬る。押勝知らずして、偽りて塩焼を立てて今帝とし、真先・朝鷹らを皆三品とす。餘は各差有り。精兵數十を遣して愛発関に入らしめむとす。授刀物部廣成ら拒ぎてこれを却く。押勝、進退拠を失ひ、即ち船に乗りて浅井郡塩津に向ふ。急に逆風有りて、船漂没せむとす。是に於て、更に山道を取りて直に愛発を措せども、伊多智らこれを拒く。八九人箭に中りて亡せぬ。押勝即ちまた還りて高嶋郡三尾崎に到り、佐伯三野・大野真本らと相戦ふこと、午より申に及ぶ。官軍の疲頓なり。時に従五位下藤原朝臣藏下麻呂、兵を將ゐて急に至る。真先衆を引き退く。三野ら、これに乗じて、殺し傷ること稍く多し。押勝遙に衆の敗るるを望み、船に乗りて亡ぐ。諸の將、水陸兩道より攻む。押勝、勝野の鬼江を阻とし、鋭を盡して拒き戦ふ。官軍これを攻め撃ち、押勝が衆潰ゆ。獨り妻子三四人と船に乗りて江に浮ぶ。石楯獲て斬り、及その妻子從黨卅四人皆江の頭に斬る。獨り第六子刷雄、少きより禪行を修むるを以て、その死を免れて隱岐國に流さる。

二十日条

甲寅、美濃少掾正六位上村國連嶋主、逆黨に坐せられて誅せらる。是の日、討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂ら凱旋して捷を獻ず。

上記十八日条及び二十日条を纏めて示すと次の如くなる。

〈官軍・賊軍〉各兵士の記載回数の卓越順

官軍では……………衛門少尉佐伯伊多智……………①②③の三回、このうち②③の二回が賊軍を殺傷する。

佐伯三野……………①②の二回、このうち②の一回が賊軍を殺傷する。

從五位下藤原朝臣藏下麻呂……………①②の二回

山背守日下部子麻呂……………①の一回

授刀物部広成……………①の一回

大野真本……………①の一回

石楯……………①の一回、賊軍を殺傷する。

賊軍では……………賊軍の首領押勝……………①②③④⑤⑥⑦⑧の八回

押勝息子真先……………①②の二回

押勝息子辛加知……………①の一回

押勝息子朝獺……………①の一回

押勝息子刷雄……………①の一回

皇胤では……………  
(天武天皇孫、新田部親王息子塩麴王)……………①の一回

官軍の賊軍に対する殺傷者……………②伊多智(越前国守辛加知を斬殺す) ③伊多智(賊軍兵士を八九人射殺す)

②三野(賊軍兵士を多数殺傷す)

①石楯(賊軍首領の押勝を初め、其の妻子三四人の他、其等妻子各々の眷属従者三十四

人の悉くを斬殺する。)

賊軍の官軍に対する殺傷者……………無し

以上の九月十八日・九月二十日両条にみる賊軍統領恵美押勝討伐に活動・活躍した兵士・兵卒の軍功の次第を纏めて一括表示することを以て諸種の懸案事項に言及する緒としたい。

人 名	既得官職	既得位階	新敘位階	昇叙階数	記載記事年月日条
山村王	少納言	正五位下	從三位	六	天平宝字8年9月9日条
坂上菟田麻呂	授刀少尉	正六位上	從四位下	五	89年11条



佐伯宿禰伊達	衛門少尉 任官近江介	正五位上勲三等	延暦4717条
--------	---------------	---------	---------

天平宝字八年九月十八・廿〇両日条にみる賊軍追討の官軍兵士・兵卒に関して

(ア)、戦功に依る昇叙階数の最も高いのは、石村村主石楯の十四階である。而も、この石村村主石楯は数多の兵卒・軍卒者中、軍士と、指称されている唯一の存在である。

(イ)、数多の官軍兵士・兵卒者中、藤原朝臣蔵下麻呂は、従五位下の官位を冠して記されている唯一の存在であり、この討賊將軍藤原朝臣蔵下麻呂は、従五位下の官位を冠して記されている唯一の存在であり、この討賊將軍藤原朝臣蔵下麻呂らが、平城京に凱旋して「獻捷」カチモノヲたと謂う。此処にみる「獻捷」ずると謂う所為は「戦利品を献上した」(『直木孝次郎他氏訳注』『宇治谷孟氏全現代語訳』)との意であると謂う。これに対して『新日本古典文学大系 15』に依れば、「戦勝を天下に報告する」ことであると謂う。併し乍ら、將軍蔵下麻呂の卒いる官軍側の戦闘振りを回顧してみると、

この將軍は何らの事前予告や報告も無く、その日も日没近い申の刻頃に、件の將軍が兵を率いて突如として其の戦場の舞台に到着したと謂う。こうしてみると、件の將軍の戦線への出現は、余りにも唐突の感を免がれ得ぬであろう。又、將軍自身が戦闘したと謂う記載もない。斯様な当日条にみる將軍の動静を考慮してみた場合、平城京に凱旋して「戦勝を天下に報告した」と解釈するのは、どう考慮してみても落ち着かない。これを成程と納得のゆく解釈にするには、宝龜六年七月一日条に載録されている後掲藤原朝臣蔵下麻呂の薨卒記事にみる「蔵下麻呂、兵を將ゐて奄に至り、力戦してこれを敗る。」とある~~~~~部分の記述を加味考慮することに依つて、



可成り納得のゆくものとなろう。

斯くて論じて此処に至れば、こと天平宝字八年九月十八・廿〇両日条にみる平城京に凱旋して「天下に勝利を報告する」と謂う解釈よりも、「戦利品を献上する」と謂う解釈の方が一籌を輸すると言い得よう。

⑬ 参議大宰帥従三位勳二等藤原朝臣藏下麻呂の薨卒記事

① 平城朝の参議正三位式部卿大宰帥馬養が第九子也。内舍人より出雲介に遷さる。宝字七年、従五位を授けられ、  
⑤ 少納言に任せらる。八年の乱に、賊近江に走り、官軍追討す。藏下麻呂、兵を將めて奄に至り、力戦してこれを敗る。  
⑥ 功を以て従三位勳二等を授けらる。近衛大将兼左京大夫、伊豫土左等国按察使を歴たり。宝亀五年、兵部卿より大宰帥に遷さる。薨しぬる年卅二。(宝亀671条)

① 藏下麻呂の世系出自

② 内舍人……………続日本紀に見えない

③ 出雲介……………続日本紀に見えない

④ 従五位……………宝字七年正月昇叙

⑤ 少納言……………天平宝字七年正月任官

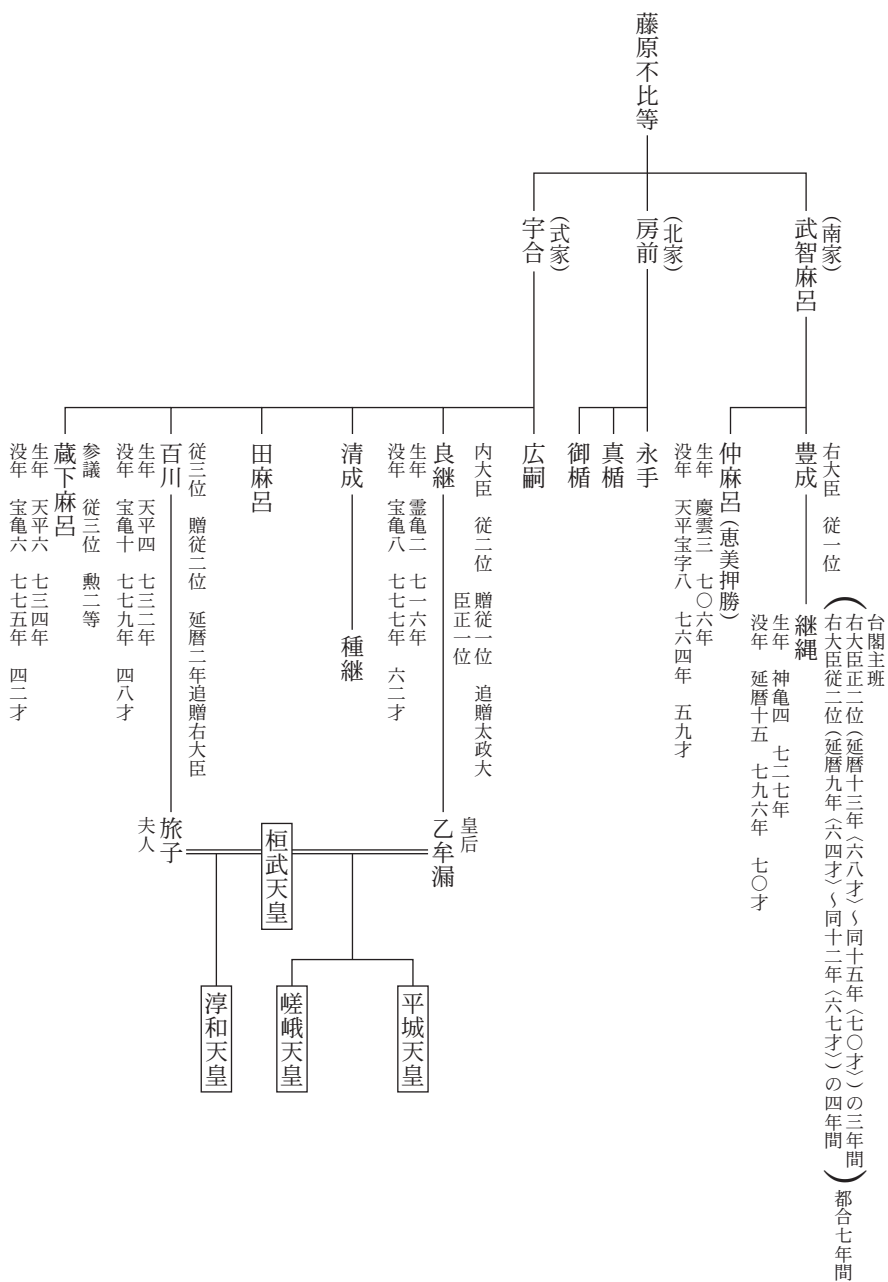
⑥ 従三位……………天平宝字八年九月

- ⑦ 勳二等……………天平神護元年正月
- ⑧ 近衛大将……………天平神護元年二月
- ⑨ 左京大夫……………任官年時未詳（「近衛大将・左京大夫如<sub>レ</sub>故」  
とあるので、それ以前）
- ⑩ 伊豫土左等国按察使……………神護景雲元年三月任官
- ⑪ 兵部卿……………宝龜元年九月任官
- ⑫ 大宰帥……………宝龜五年四月任官（但し、宝龜二年五月にも  
帥任官の記事がある。）
- ⑬ 参議……………宝龜五年五月就任

孝謙上皇側と、淳仁天皇を奉戴する仲麻呂（恵美押勝）側との間に、軍事衝突が開始展開された初期の段階で早くも仲麻呂の子息訓儒麻呂が射殺されたことに依り、仲麻呂は同天皇を奉戴することをせずに、直ちに近江国へ逃走した。爾後、仲麻呂は、近江国内に在って、孝謙上皇軍（官軍）との熾烈な戦闘を展開する中で、「偽<sub>二</sub>立塩焼<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>今帝<sub>一</sub>。眞先朝<sub>二</sub>獨等皆爲<sub>二</sub>三品<sub>一</sub>。」——我子息眞先・朝獨らを親王と同等・同格に考えて三品位を授与している。——と謂う太政官印を押した文書を発給している。これは嘗て己が子息眞從の嫡栗田諸姉を大炊王（淳仁天皇）の妻に迎えたが、この所為は、明らかに仲麻呂が諸姉を媒介として、大炊王と擬制的な親子関係を結び、而して後に大炊王を天皇に擁立することで、天皇と身内的関係に入ろうと画策したものであり、その為<sub>二</sub>に大炊王を有用な手駒として利用した<sub>一</sub>ことに外ならない。この事象を時系列の上から眺めみると、仲麻呂が己の権勢・権力を掌握するために採った手法・

方策が如何なるものであるかを能く理會することが出来るであらう。斯うした視座から觀望すると、仲麻呂は、淳仁天皇をば国家に対する謀叛罪の廉に依り、これと同行すること無く京師の地奈良より近江の国に逃走したのである。而して其の逃走先の近江の地でも、矢張り然うした手法・方策を再度試みているが、其の望むべき果実を實らせることが出来ずに完全に潰え去られたのである。

茲で話題を変えて、仲麻呂が叛逆して賊軍となり、大和の故地平城京から近江国へ逃走した。官軍が間髪を容れずに賊軍を追迹し、処々で戦闘が繰り広げられた。其の状況・状態を詳細に叙述しているのが、『続日本紀』卷第廿五である。周知の如く『続日本紀』全四十卷中、後半部分に相当する卷廿一より卷四〇までは、台閣首班でもあつた藤原朝臣繼縄らが奉勅撰者である。してみれば、正に近江国での官軍・賊軍の戦闘記載——就中、從五位下藤原朝臣藏下麻呂に関する記載は、台閣主班者であつた藤原朝臣繼縄の責任下において成立したものである。加えて光仁天皇擁立には熱く支援し、その息女旅子を桓武天皇の後宮に納れ、夫人として淳和天皇を産ましめた。亦、藏下麻呂の兄良繼は、其の息女乙牟漏を同じく桓武天皇の皇后として平城・嵯峨両天皇を産ましめている。このように藏下麻呂らは、式家宇合の血筋を受けて、血統的にも深い繋がりを持っている。（左掲系譜参照）



山村王の「密告」消息。遂果「君命」と謂うことの意釈について

参議從三位治部卿兼左兵衛督大和守山村王の薨卒記事

池邊雙槻宮御宇橘豐日天皇皇子。久米王之後也。天平十八年。授從五位下<sup>①</sup>。寶字八年。任少納言<sup>②</sup>。授正五位下<sup>③</sup>。

于時高野天皇遣山村王收中宮院鈴印<sup>④</sup>。大師押勝遣兵。邀而奪之。山村王密告消息。遂果「君命」。天皇嘉之。

授從三位<sup>⑤</sup>。薨時年卅六。(神護景雲1 11 17条)

①傍線付記部分(山村王の世系出自)

②從五位下……………天平十八年四月二十二日 此は選叙令 35 皇親の蔭によるもので、山村王は五世孫以内で

③少納言……………天平宝字八年一月二十一日 あつたことが知られる。

④正五位下……………天平宝字七年九月二十七日

⑤從三位……………天平宝字八年九月

「山村王密告」消息。遂果「君命」とはどのようなことか、具体的にはわからないが、鈴印の争奪の結果、奪還し

た状況を詳しく上奏したのであろう。それによつて緒戦を優勢に進めることが出来たということであろう。押勝討

伐軍が凱旋した九月二十日、山村王は從三位を授けられている。押勝の乱が終結してまもなく兵数百が中宮院の淳

仁天皇を囲んだ。その将のひとりに左兵衛督として山村王がいた。山村王はまた高野天皇の詔を宣べて、淳仁を廃

して淡路に送ることを告げたのである。ところで、『公卿補任』天平宝字八年の項に九月十一日に参議に任じたこと

が見え、翌九年（天平神護元年）の項には、参議従三位山村王は兼治部卿左兵衛督とある。さて天平神護元年正月の論功行賞には勳二等を授けられ、二月には大和守に任ぜられ、翌二年二月、押勝の乱の功田として五十町を賜わり、子供につたえることを許されている。山村王の官歴は以上であるが、本文で見ると参議・治部卿・左兵衛督のうち、左兵衛督在任の記事は見えるが、任官記事は、いずれも欠落している」という。こうした林 陸朗氏による詳説（同氏『奈良朝人物列伝』『続日本紀』【思文閣出版 平成二十二年五月二十八日発行】）を参考にさせていただき、ここに取り上げている山村王の薨伝に係わる左記の如き内容の箇所・箇条について、これがどのように読まれ、解釈されているかを、通常、比較的入手し易い左記の三著書・著作の関係部分を掲記し、以て今後の研究資料に供用したく思う。

#### 上記部分の内容

惠美押勝が謀反を企てているとの重大な新情報を入手した孝謙上皇は、取りも直さず、皇権発動に必須な鈴・印接收から着手した。その当時、鈴・印は淳仁天皇の御在所中宮院に保管されていたので、これを接收すべく、少納言山村王が差遣された。この当時、山村王は、小事を奏宣し、鈴・印、伝符の授受を司掌していたので、同王が差遣されたのである。これを受けて淳仁天皇の御在所中宮院より、その鈴・印接收を阻止すべく、押勝の息子訓儒麻呂をはじめ矢田部老杯が遣わされ、上皇・天皇両陣営の人士たちによる壮絶な御物鈴・印の争奪戦が展開され、結局、鈴・印は山村王により孝謙上皇の許に回収されることになった。

山村王の薨卒記事の関係部分抜萃

○直木孝次郎 他 訳注 続日本紀3 東洋文庫 五二四 平凡社 一九九〇年一〇月九日発行

天平宝字八年（七六四）に少納言に任ぜられ、正五位下を授けられた。その時、高野天皇（孝謙天皇）が山村王を派遣して中宮院に保管してあつた〔駅〕鈴と〔内〕印を接收させた。〔当時〕大師（であつた恵美）押勝は兵士を派遣して待ち構えてこれを奪わせようとした。山村王は密かにこの動静を報告してついに君命を果たした（天平宝字八年九月十一日条参照）。天皇はこれをほめて従三位を授けた。

○宇治谷 孟氏 続日本紀（中） 全現代語訳 株式会社講談社 一九九二年一月一〇日発行

天平宝字八年に少納言に任じられ、正五位下を授けられた。その時、高野天皇（孝謙）が山村王を派遣して、中宮院に保管してあつた駅鈴と内印を接收させた。当時大師であつた恵美押勝は兵士を遣わして待ち構え、これを奪わせようとした。山村王は密かにこの動静を報告して、ついに君命を果たした。天皇はこれをほめて従三位を授けた。

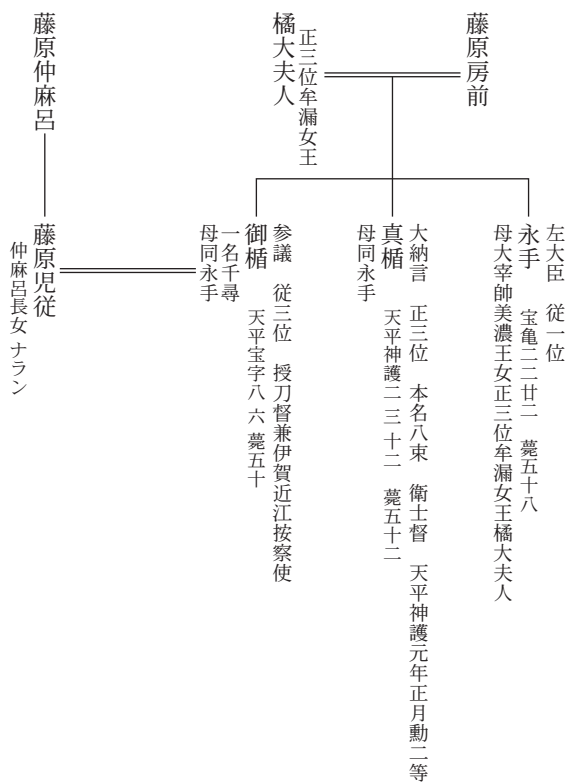
○続日本紀 四 新日本古典文学大系 岩波書店 一九九五年六月九日発行

宝字八年、少納言に任ぜられ正五位下を授けられき。時に高野天皇、山村王を遣して中宮院の鈴・印を収めしめたまひき。大師押勝、兵を遣して邊へてこれを奪はしむ。山村王、密に消息を告げて、遂に君命を果しき。天皇これを嘉して、従三位を授けたまへり。

こうした山村王の事績・事跡に関して、次の如き事柄に注意しておきたい。先ず、皇権発動に必要な御物（鈴・印）が天皇（淳仁）御在所から上皇（孝謙）御在所に接收されたことに関連して、当然のこと乍ら、両御在所の主権・主導者間に於いて武力による御物の争奪戦が展開された。この時、天皇側から押勝の息子訓儒麻呂や、中衛将監の矢田部老らが、一方、上皇側から授刀少尉坂上苅田麻呂・将曹牡鹿嶋足・授刀紀船守らが各々出動指令を受けて、所謂遭遇戦が展開され、その際に天皇側の訓儒麻呂や矢田部老らは、上皇側の坂上苅田麻呂・牡鹿嶋足・紀船守らに依つて悉く射殺されてしまったと謂う。此処には、二つの事柄が寓意されているように観られる。一つは、天皇側の人々が、上皇側の人々に依り、悉く射殺されていること。これは授刀衛を中核とする軍事力の方が、中衛府系を中核とする軍事力よりも一段と上廻っていたと訓み取れること。いま一つは、押勝の息子訓儒麻呂が射殺されてしまったことで、押勝は、この先、天皇を伴うことが不可能であるとし、もはや天皇を奉戴することが出来ないという。畢竟するに、押勝は、この先、天皇奉戴に見切りをつけたのである。そしてこうした権勢・権力の推移変遷を判然と決定づけたのは、押勝が叛逆の意を持して其の拳に出る直前の六月に、押勝の女壻で押勝側にあつて最も有力な軍事力を有する授刀督（長官）であつた藤原御楯が薨じてしまったことである。此処で付言を少々。押勝と



御楯の密接な関係は、押勝の息女兒従を介して成立していること。岸俊男氏（人物叢書『藤原仲麻呂』昭和四四年三月一日発行、一二六頁）によれば、御楯の没年齢は五〇歳、其の令室兒従は押勝の長女であるという。付言のいま一つは、前に取り上げた藤原真楯薨去伝に「（天平宝字）八年至正三位勳二等兼授刀大將」とあり、『公卿補任』に依れば、乱勃発時の九月十一日に、真楯が上皇側の武力の中心授刀督（長官）となつて、乱後に其の軍功が認められて勳二等を授与されている。



上来、付言として陳述して来たところを含めて、問題の文意不通箇所を種々考量してみた結果、国家の大事に互る事柄である故に「ひそかに」との文言を添えて山村王は「密告」消息。遂果「君命」と謂う報告をしたのである。これに就いて直木孝次郎、宇治谷 孟両氏は……………「密かにこの動静を報告して、つひに君命を果たした」と訓み、「物事の動きや、物事の存在していたのが存在しなくなった」と解するよりも、もっと深い「それからどうする。どう動いていくか、これから事態がどのように進展していくか」と解することが出来るし、また、このように考えを進め深めていくのは、相手のことや、その出方を能く観察して、それに相応しく対応し、対処していくためである、と釈義するのである。続いて新日本古典文学大系の本文解釈・注釈担当者らは……………「密に消息を告げて遂に君命を果した」と訓み、「鈴・印が奪取された時の様子について、その時の対応がどのようなものであったか、そうなったことの原因や状態が如何なるものであったか、これからどう対応していくのか、また、そのためにはどのような方針で臨み、それにはどのような手立や方策を講じていくのがよいか」と解釈する。上記の著書注釈者たちの理解の仕方と内容は、凡そ以上のものである。これらの著書にみる訓みや、その語釈理解にも、もちろん領けるところは多々あるが、最後に仲麻呂の暴発寸前の頃おいに於ける天皇、上皇双方の關係に若干触れて、然る後に、本節で主たる討究対象として掲げている山村王薨卒伝——特にそこにみる難解の文言「密告」消息。遂果「君命」。に就いての鄙見を開陳するにあたり、まず、当時における天皇・上皇両者間の關係が如何なるものであったかについて述べておこう。

淳仁天皇は道鏡のことを絶えず口にして、孝謙上皇を批判した。その結果、ついに天平宝字六年五月二十三日には両者決裂状態となり、両者は各々保良宮から平城京に還幸することになった。天皇が平城宮中宮院に還つたのに対し、

上皇はそのまま出家して法華寺に入ってしまった。同年六月三日孝謙上皇は淳仁天皇を激しく非難して「国政に關しては、今の帝淳仁には、ただ常祀や小事を行ない、国家の大事と賞罰の二柄は全て自分が執り行なう」と託された。

これを拙論の稿者は、仲麻呂の謀叛暴発の噂さが諸所より頻りに伝声されている時が時だけに、それに亦、国家の大事も小事も悉く、これを孝謙上皇が執り行うべきとする施政方針の趣旨内容を充分に熟考した上で、山村王が上皇に極秘裡に上奏したのであらう。これは又、拙稿論者の結論でもある。

## 村国嶋主伝

贈<sup>二</sup>正六位上村国連嶋主從五位下<sup>一</sup>。嶋主者壬申年功臣贈外小紫男依之孫也。始仕<sup>二</sup>仲滿<sup>一</sup>任<sup>二</sup>美濃少掾<sup>一</sup>。寶字八年。遣<sup>二</sup>使固<sup>レ</sup>關。嶋主内應先歸<sup>二</sup>朝廷<sup>一</sup>。勅使以<sup>二</sup>其初逆黨<sup>一</sup>。横加<sup>二</sup>誅戮<sup>一</sup>。死非<sup>二</sup>其辜<sup>一</sup>。故有<sup>二</sup>此贈<sup>一</sup>。（『続日本紀』天平神護2 11 10条）

村国氏は美濃国各務郡（現、岐阜県各務原市）の地名をウジの名とする豪族で和名抄の同郡に村国郷があり、神名式の同郡に村国神社二座・村国真墨田神社がある。この村国嶋主伝には「仲滿」なる表記が一行のみ見られる。嶋主は、この「仲滿」に仕えて、自己の本貫地美濃国の少掾に任用された。天平宝字八年にナカマロが叛乱を勃発した時、朝廷は不破関を固守させるべく、使者を当地へ派遣せられた。嶋主は真先に朝廷に内応し、帰順していたが、勅使の認識では、嘗て嶋主がナカマロの党派であったとして、嶋主を誅戮して畢つたと謂う。この嶋主誅戮に就いては、上記嶋主伝に「横加<sup>二</sup>誅戮<sup>一</sup>」とある「横」の字義が重要な意義をもつ。即ち「横」は「誤解により」、或いは「不当

にも」の意であるから、当の嶋主本人は固よりのこと、又、この当時の人々も、それで決して納得のゆくものではなかったであろう。

してみれば、事の成り行きからして、自ずと當時に於ける嶋主の言行を知る人々の間からも、この嶋主の存在とその結末に於ける事態とが、その祖父で往時の「壬申の役」に於ける功臣でもあつた村国小依（男依・雄依）の、武天皇元年六月に勃発した所謂「壬申の乱」に際し、その本貫地美濃国に先行して兵を発し、不破道の封鎖に成功させ、続いて翌七月には、書首根麻呂等と共に数万の兵を率いて敵軍の本居地近江国へ侵進し、近江軍を撃破敗走せしめると謂つた、その武勳赫々たる活躍に依り、小依は同天皇五年七月の死没に際し、外小紫位を贈られ、爾後、元正天皇靈龜二年四月には「男」の志我麻呂に賜田の恩典があり、更に孝謙天皇天平宝字元年十二月には「壬申の役」の功田一〇町を中功として、二世に伝えしめるとの記載が本書（『続日本紀』）に所見される。茲に翻つて思うに、凡そ、天武朝に於ける外位授与は、全て死没者の死没時に於ける追贈であり、卑姓氏族出身者への行賞の意味合いが強いと考量されるところ所説（井上光貞監訳『日本書紀』昭和六十年十一月二十日発行 中央公論社）は、充分に頷可し得る卓論・卓説と云い得よう。